# 平安時代漆芸技法資料 Ⅵ

## ——宝相華蒔絵経箱——

中　里　寿　克

国宝　宝相華蒔絵経箱　一合　　滋賀　延暦寺蔵

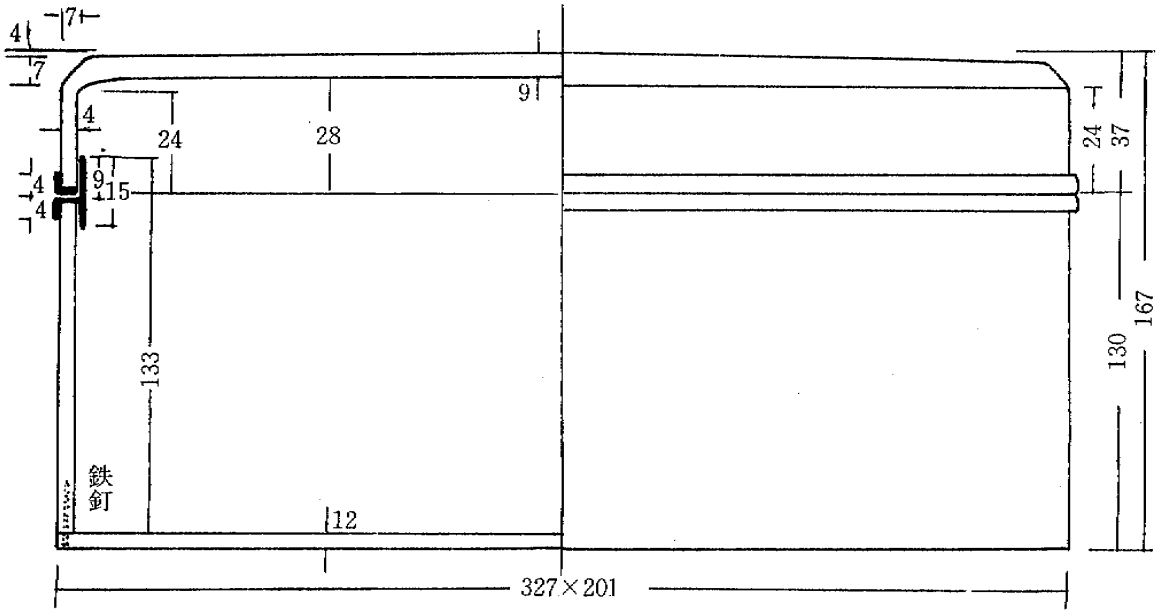
法量　縦　327ミリ，横　201ミリ，全高167ミリ

身高130ミリ，蓋高 37ミリ

### 1. はじめに

平安時代漆芸遺品の多くはその伝来を知り得ないが，この箱も例外ではない。近年になって叡山に持込まれたものでないとすれば，元亀2年の信長の討伐の際にも辛じて残って今日に伝えられて来たものであろう。それだけ丁重な扱いを受けて来たとも云えるが，その事を領けるのは明治以前にすでにかなり大規模な修理を加えて，この経箱を保存しようとした事が認められるからである。修理前の状態はかなりひどいものであった様だが，現在見られる様な姿になってからはほとんど変化していない様に思われる。この経箱の存在は早くから知られていたらしく明治中期の出版物にすでに載っており[1]，冊子箱や宝珠箱より少し遅れて明治33年に旧国宝に指定されている。

近年までの評価はほぼ固まっていて，冊子箱や宝珠箱，蒔絵挾軾，東寺袈裟箱などと共に初期蒔絵の代表的遺品とされて来たが，現在その製作時期は必ずしも一定しないまでも，『日本国宝全集』（昭和6年）では平安中期以前とし，『国宝』（毎日新聞社昭和42年）では11世紀中頃，秘宝比叡山（講談社昭和45年）では11世紀頃とその製作時期を若干降った頃におさえられて来た[2]。しかし更に降った説もあり『仏教芸術』61号(昭和41年)で切畑健は平安中期の末と



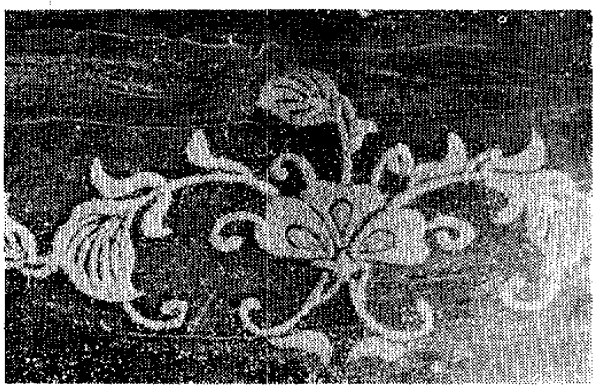

図—1 実　測　図

しているのは注目される。これらの多くは解説として述べており，論拠を見出し得ないのはやや不満であるが，ここでは一応諸説をふまえて製作技法について述べ，更に出来れば製作年代にまでも及んで見たいと考えている。

## 2.　経箱の形状について

この蒔絵経箱は長方形の深目の箱で，錫の覆輪をつけて合口造りとしている。身箱は畳ずれなく底は平面である。内面には牡丹唐草文金襴を覗するが，これは後補であろう。蓋は塵居を造らずに面取りとし，甲面はほとんど目立たないが僅かに甲盛りをつくる。内面の見込みは浅く削って丸味をつけている（図—1)。

蒔絵は表面全面に施こされている。その図様は各面全体に大円文を２つ並べるパターンに大きな特徴があり，蓋甲面と身長側面にこれが見られ，短側面には１つを入れる。円文は巾一ぱいに画くので，蓋では楕円形に，短側面ではやや大振りになって少しつぶれた形になる。大円文は巾広の沃懸地帯とし，円内には中央に金で四弁花文を一つ画き，それから葉を銀，花を金として宝相華を４方にシンメトリーに広げる。円文外も宝相華文で埋める。内外の宝相華文部は平塵地としている。大円文帯には所々に飛鳥と瑞雲をおくが，この円が一つの大きな世界を表わしている様に思える。蓋裏は金銀の平塵地とし，中央と四隅に銀による宝相華を描き，葉と花芯には金あるいは青金を点じている（図—2)。



図—2　蓋裏宝相華文

図—3　蓋側面修理部分と覆輪

現在甲面の一方の端の矧目と思われる部分が表裏とも修理されているほか，両短側面にも修理が見られ，身箱の底縁と四隅にも大巾な後補がある。これらの個所にはいづれも唐草風の文様が加筆されている。又覆輪も身のものはかなり腐蝕が目立つが，蓋のはそれほどでもなく，あるいは両者は同時のものでなく，後者は比較的新しいものであるかもしれない。身のものにしても当初のものであるかどうかは不明である（図—3)。

箱に用いた用材は桧と思われ，目のつんだ柾材が使用される。側板，底板とも矧目はないが甲板は現在修理個所があり，その部分が矧目とも考えられるがはっきりしない。隅の合せ目もどの様な組み方がなされるのか判然としない。組継ぎ又は相欠きの様な細工はせず，板と板を平継ぎにしただけの様である。

甲板，底板はそれぞれ上と下から側板に天付けされるが，甲板は縁を面取りとし更に４ミリほど甲盛りをつけ，裏は同じく４ミリほど全体にほり凹めて丸味をつけている。

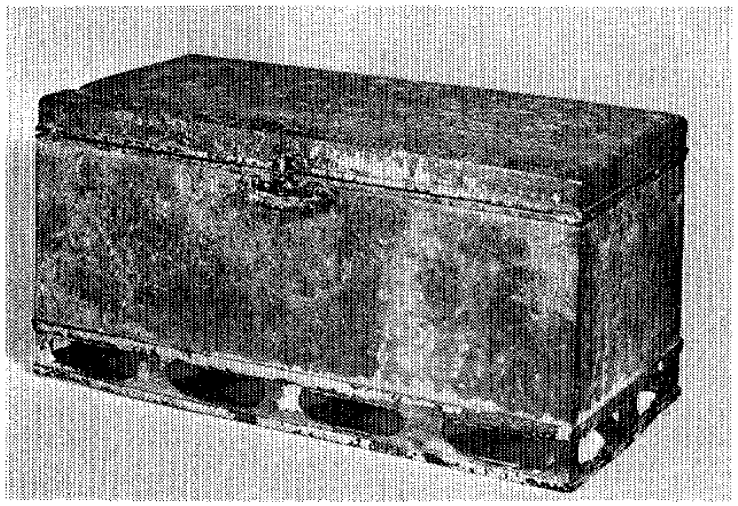
用板は実測では蓋側面では４ミリ，身側面では５ミリほどあり，甲板は実厚９ミリだが，ほり凹め分を入れると13ミリほどの板である事がわかる。底板は約12ミリである。

## 3. 文様について

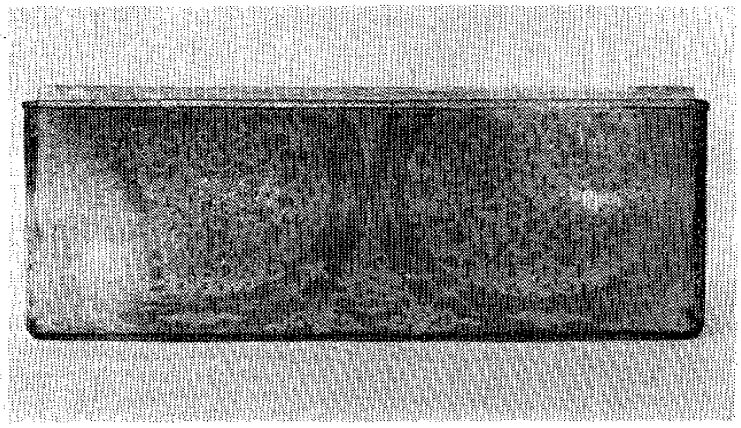
以上の様にこの経箱の形体は直線的であり，奈良朝の遺風を強く受継いでいると見えるのは誰も異存のない所であろう。この経箱とまったく同じ形式を持つ経箱が金峰山経塚から出土しており[3]，この様な形式の箱が平安時代に異例のものでなかった事が知られる（図—4）。出土した経箱は金銅製で蓋を合口とし，蓋上縁を面取りとするが甲盛り胴張りはない様である。底には牙象を穿った低い床脚をつけており豪華なものである。文様は毛彫りで各面に小振りの円帯文を間隔をおいて描き，更に同じ円帯文を隅を中心に両側に振り分けて描き，箱全体に円帯文が等間隔に配置される様になっている。円帯文内には双鳥と宝相華が描かれる。この金銅経箱の製作年代は確かではないが11世紀末と云われている。形体及意匠は以上の様にまったく蒔絵経箱と同じ趣向であり，両者の類似性から考えると蒔絵経箱の製作年代を考える上に無視出来ないものである。

この様な奈良時代風な箱は他に類例はない様だが，円文を並べて構成する意匠のものは他に2，3の遺例を見出す事が出来る。

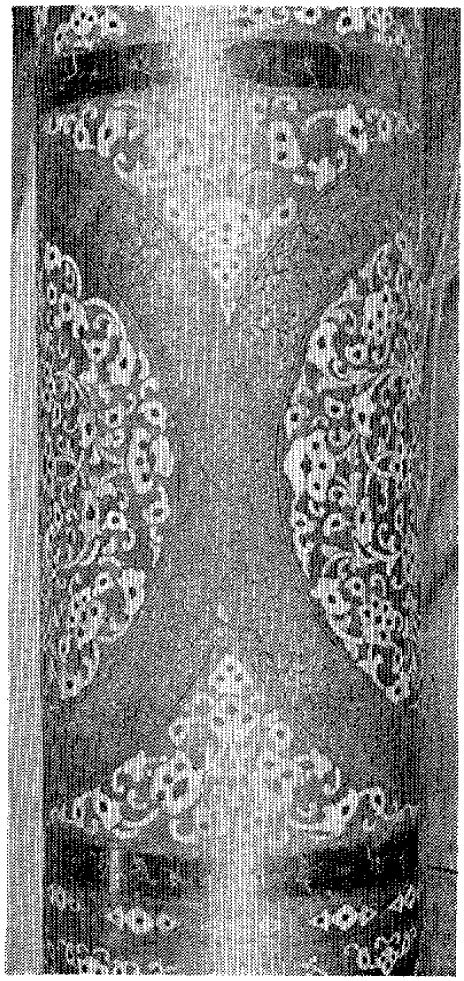
すなわち平安末期頃と云われる重文紫檀螺鈿宝相華鳳凰文平胡籙（瀬津家）では背板の表面に鳳凰と宝相華を蛮絵風に円文にまとめた螺鈿文を縦に二つ重ねる意匠を持つ。又平安時代と比定するのには難しいものだが唐草円文繋白鑞平文経箱（武藤家，武田家）では甲盛り胴貼りを持つ合口造りの箱に錫平文で宝相華文を円形にまとめ，二つ並べた意匠が見られ，円文帯は余地として残し，そこに飛鳥，瑞雲を散らしている。この意匠は以上の様に蒔絵経箱のそれと



図—4　金峰山経塚出土金銅経箱



図—5　白鑞平文経箱（武田家）



図—6　中尊寺金色堂四天柱螺鈿文様

まったく同じもので，意匠で見るかぎりは平安様式を継承するものと云ってよい（図—5)。建築装飾には更に類似のものが求められ，中尊寺金色堂四天柱の下部に見られる螺鈿大円文もこの様な意匠の一つと云ってよかろう（図—6)。これは柱の表裏に一つづつ円形にまとめた螺鈿文を置き，これが側面で接しており，周囲は宝相華の蒔絵円帯でくくっているものである。更に内法長押，無目等の横長材に見られる見付文様も又この様な意匠の展開したものと考えられなくもない。横長に延ばされた文様を全体に縮めると円文を並べた文様が浮かび上ってくる。見付文様としては醍醐寺五重塔装飾にその早い例が見られるが鳳凰堂，中尊寺，白水阿弥陀堂その他いくつかの平安盛期の建築内部装飾にその顕著な例がある。しかし円文に最も近似性のあるのはこの様な彩色としての見付文様でなく，螺鈿で飾った見付文様である。現在この様な遺例は鳳凰堂須弥壇（1053）と中尊寺金色堂（1124）にしかないが当時の阿弥陀堂の流行を考えれば他にも螺鈿の装飾された例も多かったと思われる。鳳凰堂以前にも記録に見える法成寺（1022）では格子の組子に花形の螺鈿を嵌めた事が記されており，11世紀初期に既に螺鈿と建物とは結びついていた事が知られる[4]。しかしこの様な装飾はあくまで阿弥陀信仰に関係するものであり，それ故10世紀まで遡る事はなかったろうと思われる。そして円文の発展的姿は中尊寺金色堂の螺鈿装飾文を頂点として少しづつ形式化されていった。

## 4.　蒔絵及蒔絵粉について

蒔絵は箱全体に金・銀・青金で研出蒔絵とする。すなわち全体を淡い平塵地とし，宝相華花文は金，その芯に青金を蒔き，宝相華半花文芯には銀を蒔く。葉文と飛鳥，瑞雲等には銀を蒔く。葉芯は青金とする。円帯は粗い金粉を濃く蒔いていて平塵地と区別するが，蒔ぼかしとしないので，この部分のみ先に粉蒔きした後，全体に平塵粉を蒔いたものと思われる。

蓋裏の文様は葉文花文を銀とし芯に金又は青金を点ずる。全体は金の淡い平塵地とするが，文様を中心に周辺に銀粉が散るのが僅かに見える。漆はかなり透けて赤味をおびる。

身内は牡丹唐草文金欄の嶺とし，底は塗漆のみである。

蒔絵は技法的にみてそれほど高度のものでなく，多少変化を示した所と云えば花弁と花芯を蒔分けた程度のものであろう。細部を金又は青金で変化させる方法はすでに宝珠箱に見られており，蓮唐草蒔絵経箱や仏功徳蒔絵経箱，沢千鳥蒔絵小唐櫃などにもあまり目立たないが見られる。この箱の技術が単純な点ではむしろ宝珠箱のそれに近いといえよう。

蒔絵粉は5種類ある。今これを分類すると次の様になる。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 表　文 | | 金 | 宝相華花文（図—7） | 細 | 角ばらず丸味があり米粒形。比較出来るものが少ないが沢千鳥蒔絵小唐櫃粉，蓮唐草蒔絵経箱粉に似る。 |
| | | | 円帯文（図—8） | 粗 | 細長いもの多く，あまり角ばらない。蓮唐草蒔絵経箱粉に比して丸味がある。粒子が揃っている。 |
| | 蓋裏 | | 平塵粉（図—9） | 粗 | 円帯文粉と同じ粉かもしれないが，粒子が揃わず雑然としている。やはり細長い粉が多い。 |
| | | 青金 | 宝相華花芯葉芯（図—10，12） | 中 | 細長の両端が尖った様な粉形をしている。一部にくず粉の様な粗細が混じた粉が蒔かれる所もある。 |
| | | 銀 | 宝相華葉（図—11） | 細 | X線透視写真による観察では一段と細かい粉で丸形だが，輪郭は平滑でない。 |

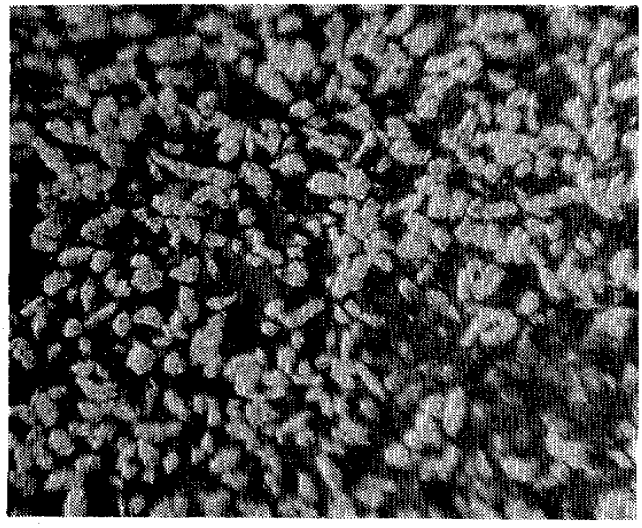
金粉は一般的に米粒形と細長形が見られ，これらは丸味がある。青金は特徴的なトゲ状をしている。又銀粉は細粉だが円形と云ってよい。金粉と青金粉とを比較すると前者は粒子もよく

揃い洗練された形をしているが，後者はやや古拙さが感じられる。

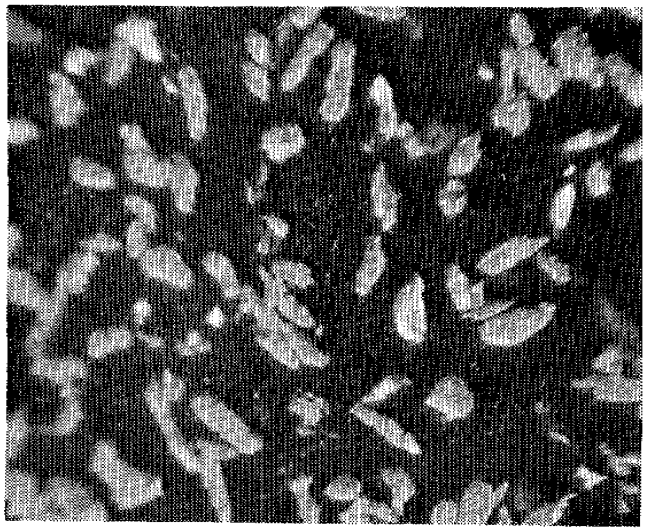
これらの5種の粉はいづれも特徴的で個性があり他の平安時代の粉と比較して類似性を求めるのは不可能に近い。むしろ一点一点がすべて異なると考えた方がよいぐらいである。強いて比較するとすれば金粉は蓮唐草蒔絵経箱粉や沢千鳥蒔絵小唐櫃粉に近い。又青金は蓮唐草蒔絵経箱粉のは少し角ばるがトゲ状でないし，蒔絵箏（春日大社）のものはやや角ばるが小判形をしており，宝珠箱のは細かい米粒形に近いなどで，いづれも類似せずむしろ冊子箱の銀粉に近いのは興味深い。銀粉は普通では銹暈のため観察出来ないし，X線透視でも細かくて現われない事が多い。その銀粉にも二つの形があり，一つは冊子箱，蒔絵箏，野辺雀蒔絵手箱等に見られる大形で円くないものと，二つには倶利迦羅竜蒔絵経箱等に見られる小形で円形のものである[5]。この粉は当然，後者の粉に属すべきものであろう。

## 5. 結　　語

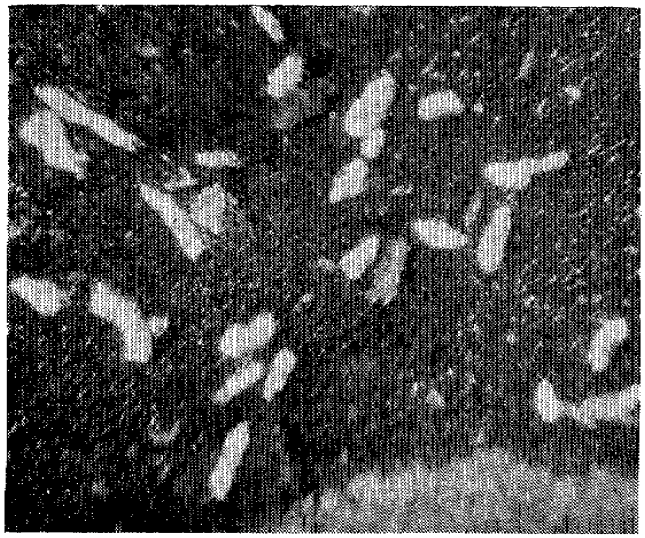
この蒔絵経箱の特長の一つは形体にあり，奈良時代的な要素が強いその形は平安時代漆芸遺品の内にあってかなり目立つものである。この蒔絵経箱とほとんど同じ形体と意匠を持つ金銅経箱を金峰山経塚遺物の内に見出す事が出来る。この金銅経箱は少くとも11世紀末と見做され



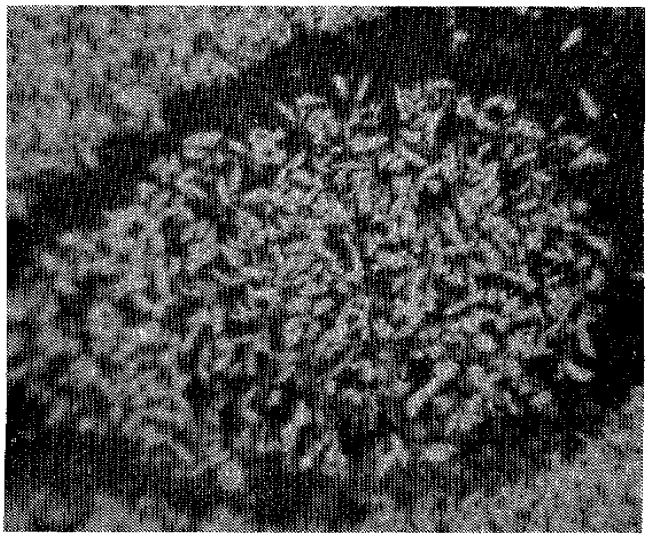
図—7　宝相華花文金粉



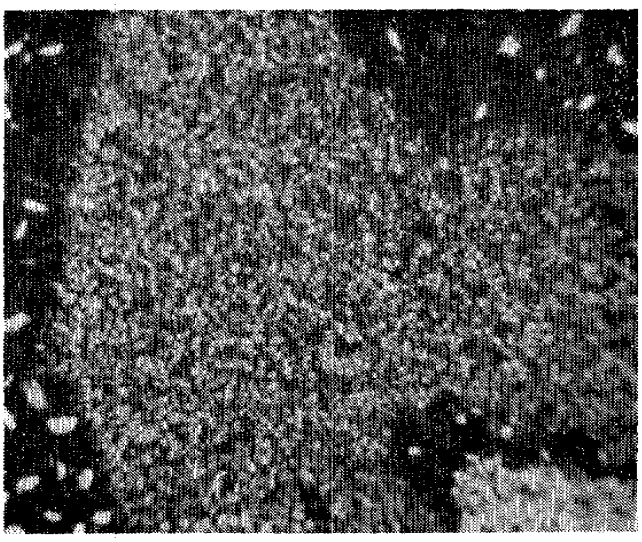
図—8　円帯文金粉



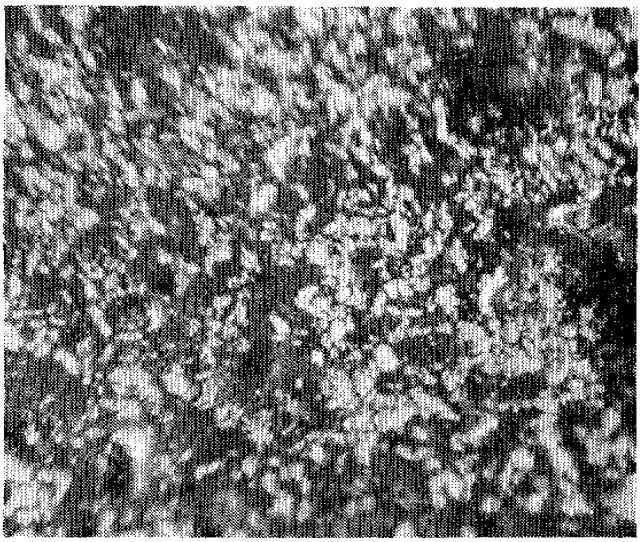
図—9　平塵金粉



図—10　宝相華花芯青金（I）



図—11　宝相華葉文銀粉（X線）



図—12　宝相華花芯青金（II）

ているが，宝相華文などを蒔絵経箱のものと比較すると，蒔絵経箱のものはいかにも繊弱で，形式化された感じを免がれず，金銅経箱までは遡り得るものでない事がわかる。この事は蒔絵意匠についても云え，そこに見られる双円文は，当時流行した阿弥陀堂装飾としての螺鈿文や彩色見付文様にむしろ近い様に思えるのである。その遺例は云うまでもなく平等院や金色堂等に代表されるものであるが，これらは11世紀後期からの所謂院政時代に集中して数多く建立されたと云われる。したがってこの蒔絵経箱もこの様な文様の流行に乗じて製作されたと考えても不自然ではあるまい。院政時代初め頃の蒔絵がどの様なものであったか，もちろん正確に指摘出来るものはないのだが，11世紀後期以降遠くない時期にかけての遺品と考えられるものはいくつかあげる事が出来，常識的には蓮唐草蒔絵経箱，仏功徳蒔絵経箱，沢千鳥蒔絵小唐櫃などの一連の遺品であり，これらの遺品の技法は今までの調査では大旨共通したものを持っている。この蒔絵経箱も以上述べた事によってその範疇に入れて然るべきものと思われる。

結局この蒔絵経箱の製作年代は院政時代の初めの頃に求め，和様様式としての沢千鳥蒔絵小唐櫃等が作られる少し前，11世紀最末から12世紀初と考えてみたい。

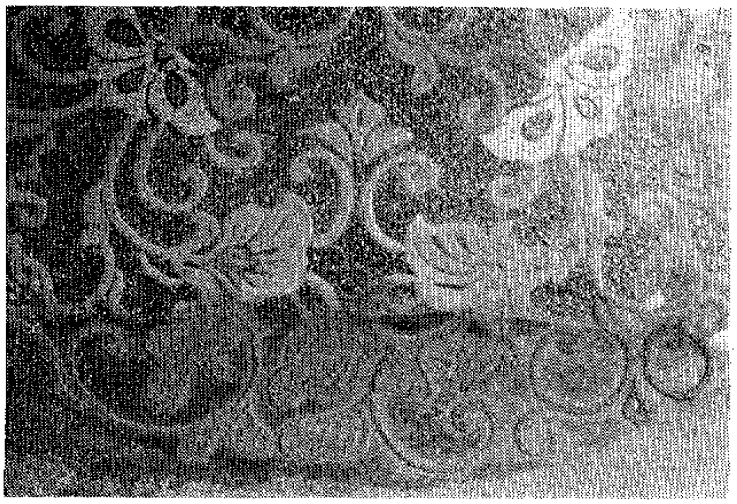
なお，この蒔絵経箱には畳ずれなく，底部は破損がひどいが，あるいは金峰山出土金銅経箱と同じく床脚をもつ経箱であったかもしれない。仁和寺御室実録（天暦四年950）には金銀蒔絵牙象筥というのが四個も記されており，当時この様な箱が流行した事は確かである。

## 付　　記

修理の方法と時期について

この箱は周到な修理が行なわれている事は先述の通りである。その個所は甲面や側面隅などかなりの部分に及んでいる。

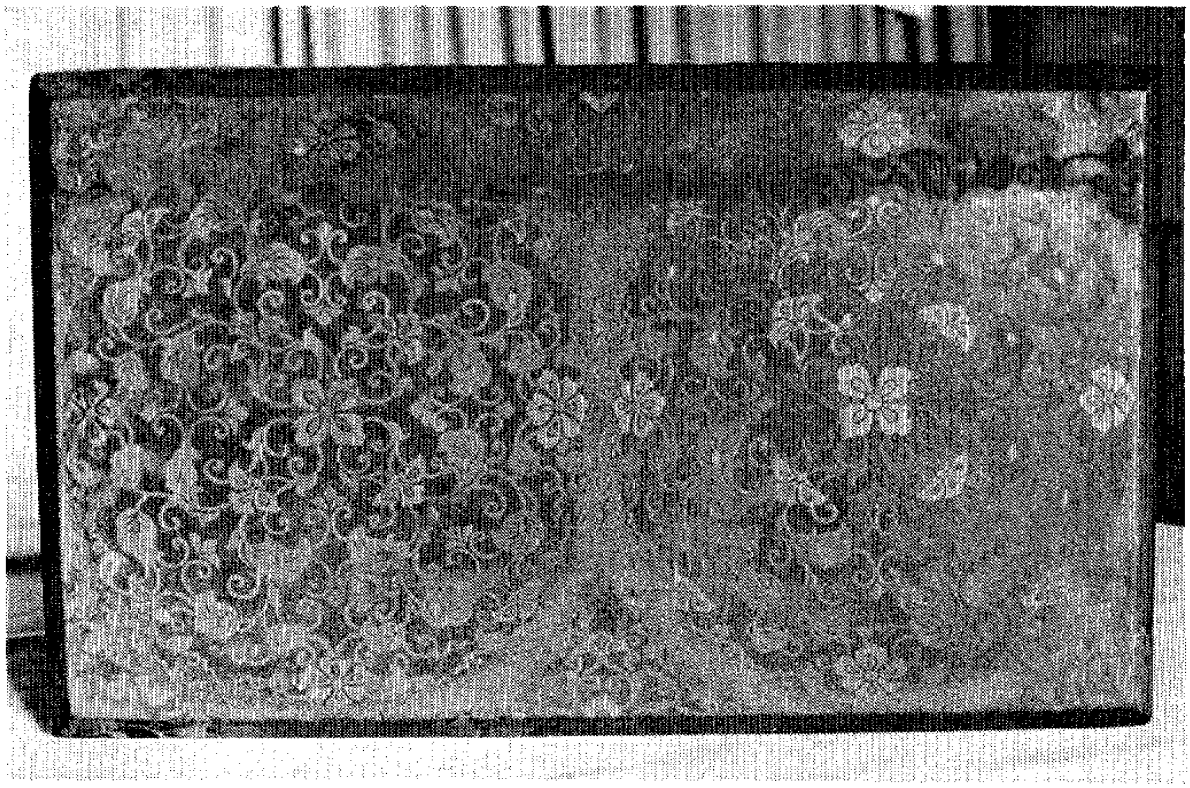
修理の方法は平塵に似せて平目粉（小三小相当）を遠慮がちに少し蒔いて研つける。宝相華文も加筆するが，銀銹に似せて粗い粉を蒔いて盛上げているが，X線透視にも造影されているので，銀粉を



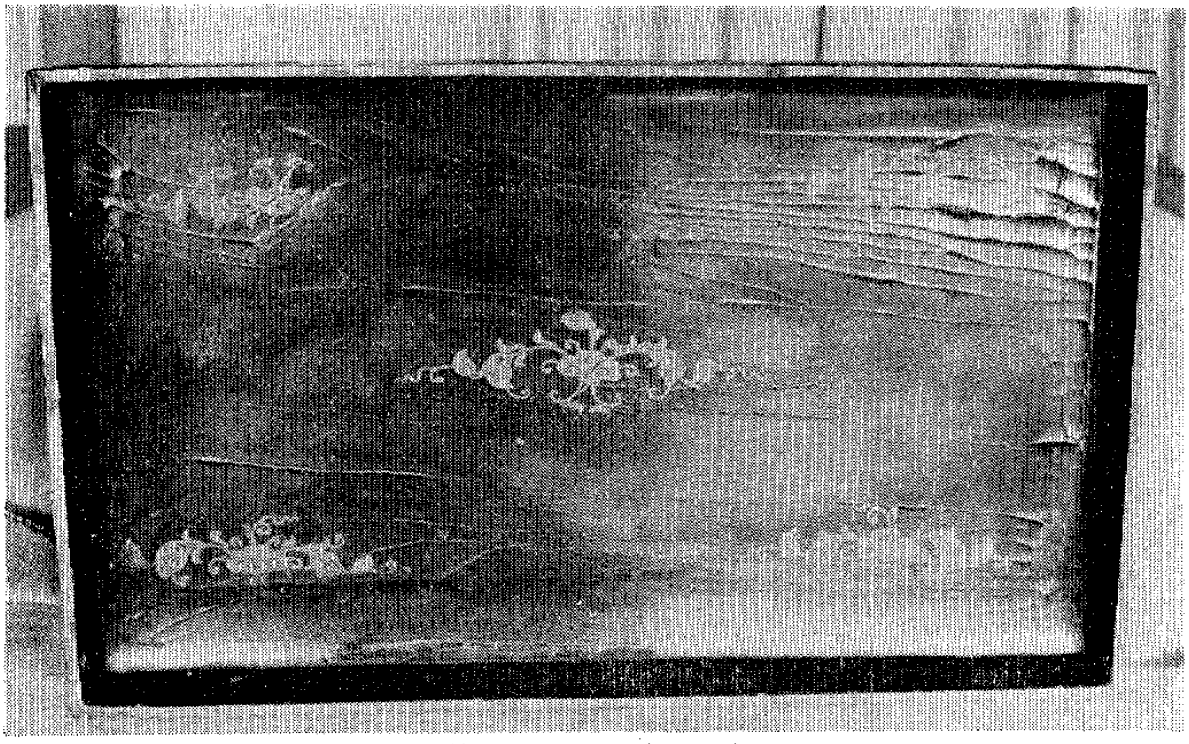
図—13　宝相華文と修理部分

蒔いた後いぶしたかもしれない。金の花文の所はいづれも避け，又側面の円帯欠損部分は宝相華文に蒔いたと同じものを細巾にまばらに蒔いている。

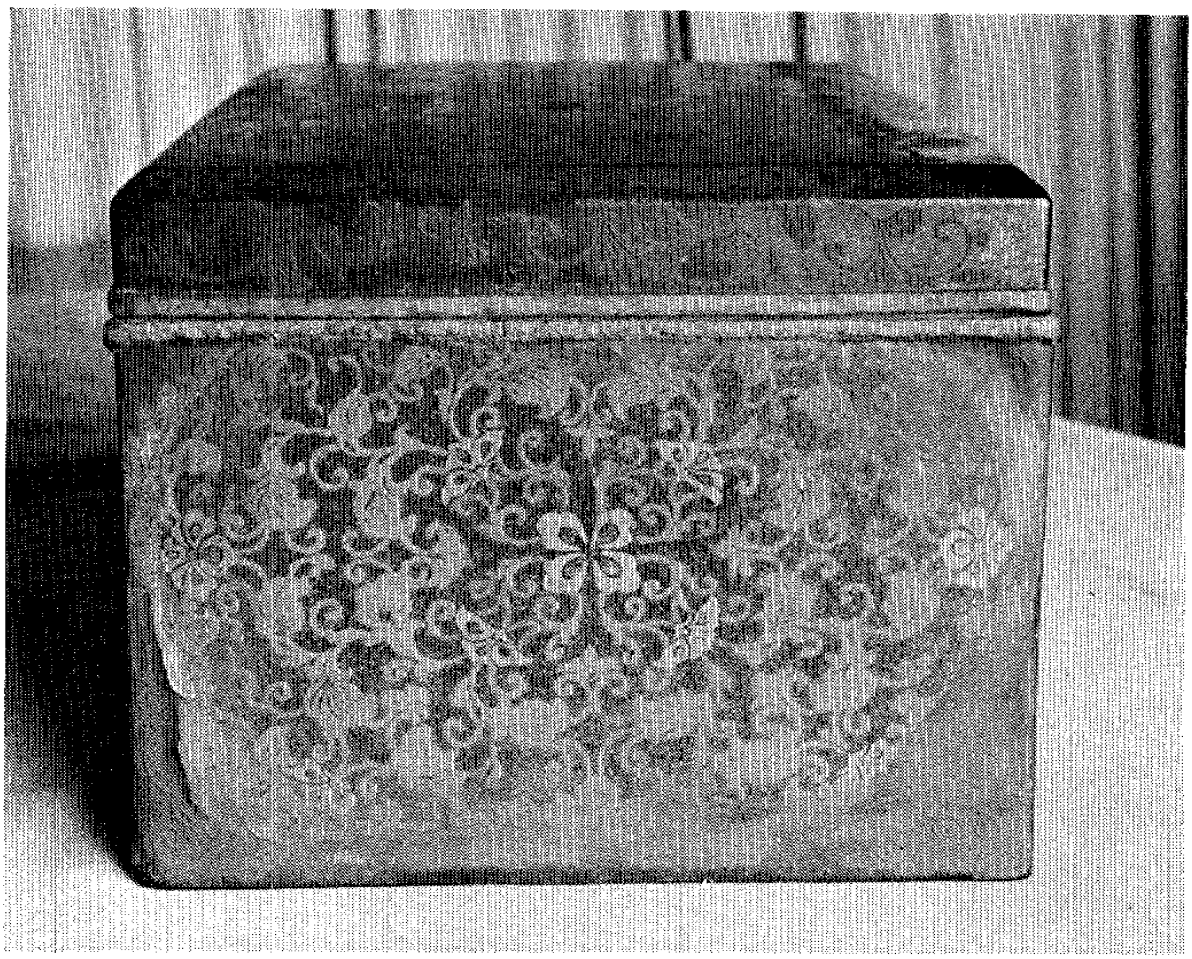
X線透視写真で窺うと，この底板は鉄釘で側板に打つけられている事がわかる。この事から底板は後補とも考えられたが，X線透視写真では矧目に貼った筋布が見え，当初のものである事は間違いない。おそらくある時代にはこの経箱はかなりひどい状態であったと思われ，底板



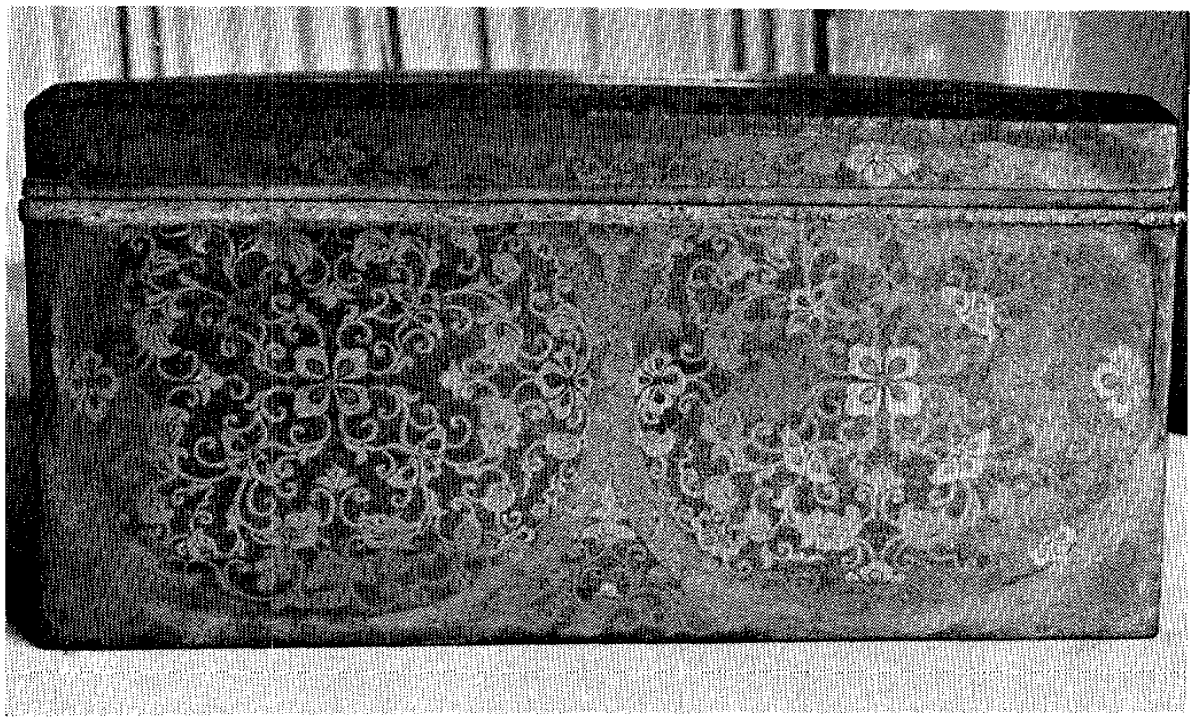
付図—1　蓋　甲　面



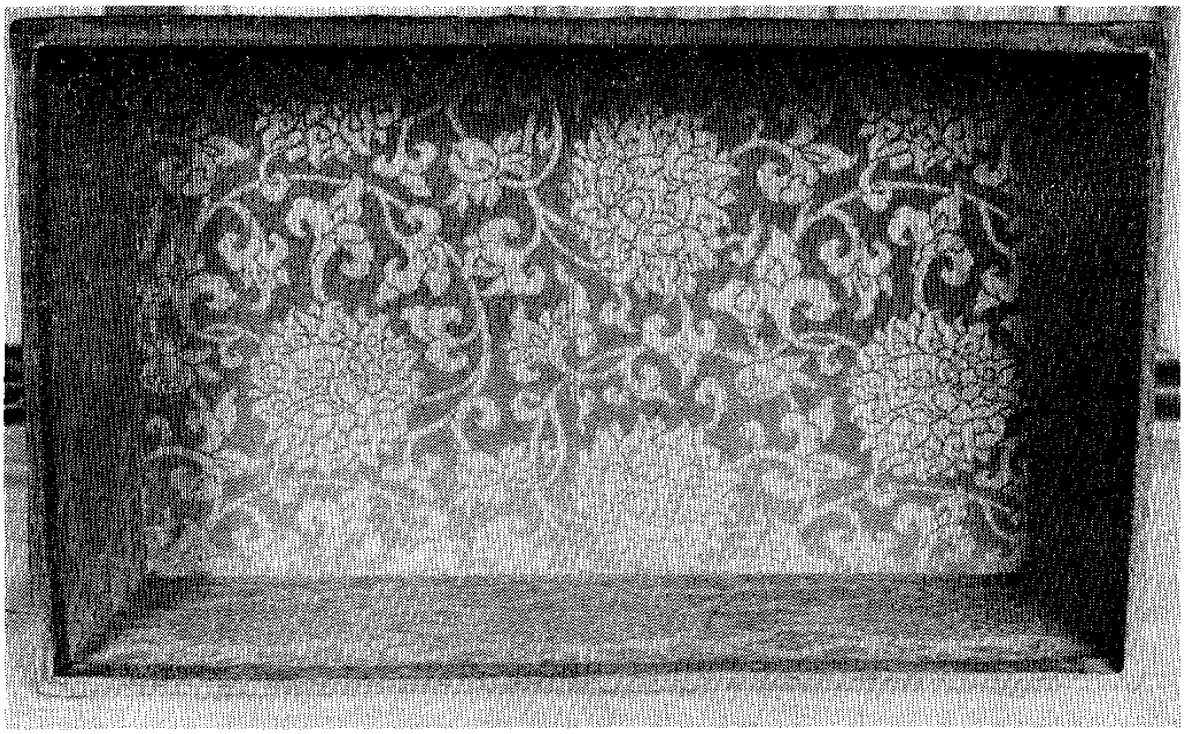
付図—2　蓋　裏　面



付図—3　側　　面



付図—4　側　　面



付図—5　身　内　面　覗

ははずれ，甲板も大きな割れが入り，しかも蓋の短側板は両側とも欠損していたかもしれない（短側板は表裏とも塗直しがあり当初の塗漆部分はない）。

この修理がいつ行なわれたかは問題だが，鉄釘が和釘であり，しかもかなり銹が進行している所をみると，少なくとも明治か，それ以前である事は確かである。明治31年発行の「全国漆器生産府県連合会参考目録」には現在とほぼ同じ状態の写真が掲載されている事からして，その頃にはすでに修理は行なわれている。

修理部分には宝相華文を唐草文に書きかえて，かなり達者な描線を見せているが，それを見ても江戸末から明治初の蒔絵師の手になるものであろうと思われる（図—13）。明治初年には小川松民等による正倉院御物の模造などが盛んに行なわれており古典に対する認識も高まっていた事でもあり，この蒔絵経箱の修理もあるいはその様な仕事の一つであったかもしれない。いづれにしてもそこに見られる修理のあとは文様などに独善的な所が見られるにしても，本格的なものであり，決して一時的な中途半端なものではないのには敬服したい。

## 謝　　辞

この蒔絵経箱の調査を叡山の秘宝殿で行なったのはかなり以前になるが，その際にお世話になった瀧口宥誠氏と，その後京都国立博物館寄託中は工芸室長（当時）吉村元雄氏に御便宜をいただき精査し得たことを心から感謝致したい。

なお，本文中のX線透視に関する事については，当研究所保存科学部石川陸郎研究員撮影のものを参考にさせて頂いた。

## 文　　献

1)　全国漆器生産府県連合会参考目録　明治31年

2)　製作年代については諸説があり，先述以外のものでは次の様なものがある。

- 日本漆工史　10世紀末　　昭7　六角紫水
- 世界美術全集日本II（平凡社）11世紀　　昭29　溝口三郎
- 日本美術全集V（東都出版）11世紀頃　　昭29　岡田　譲・野間清六
- 原色日本の美術20（小学館）11世紀中頃　　昭44　岡田　譲

3) 金峰山経塚遺物では道長願文経筒（寛長4年・1008）が有名だが，他にこの金銅経箱と同類と思われるものが3個あり，これらは経筒とは別に埋経されたと考えられており，師通が道長に倣って寛治二年（1088）に埋めたとされる。。（金峰山経塚遺物の研究）

4) 法成寺の創建　家永三郎　美術研究104　昭15年
栄花物語巻第18たまのうてな
「(略)東向に十余間の瓦葺の御堂あり。棰の端々は黄金の色なり，萬の金物皆こがね色なり。おまへの方の犬防は皆金の漆の様に塗りて，ちがひめごとに螺鈿の花のかたをすへて，いろいろの玉を入れて，かみにはむらごの紐してあみを結ばせ給へり。」

5) 古代蒔絵粉の研究　中里寿克　保存科学9号　昭49年

## Technical Data of Lacquer Work in the Heian Period (VI)

Toshikatsu NAKASATO

The present article is a technical study of the Hōsōge Maki-e Kyōbako (Sutra Box Decorated in Maki-e with Design of Hōsōge Flowers) owned by the Enryaku-ji Temple. The box, made of *hinoki* (Japanese cypress) wood, is decorated with roundels and *hōsōge* flowers executed in *togidashi* (burnished) *maki-e* of gold and silver. Its straight outlines reveal strong influence of the Nara period. However, a gilt bronze sutra box unearthed at Kimpusen, which is identical with this in shape and decoration, is ascribed to the beginning of the eleventh century if not earlier. Comparison of their decoration proves that the box under discussion cannot date back to the early eleventh century.

Five kinds of metal particles are used in the *maki-e* decoration of this box. The technique of using them, however, is relatively simple and shows similarity to one noted on specimens of the eleventh to early twelfth centuries. Most probably the box was made near the end of the eleventh century when peculiarly Japanese style of lacquer art was establiehed.